

静岡新聞 2024年 / 月24日付

論壇

東京大名誉教授(国際経済学)

伊藤 元重

デフレが続いた過去20年の時代をどう総括したらいいのだろうか。デフレにはいろいろな側面があるので一言でまとめるのは難しいが、私はあえて「停滞と安定の時代」と呼びたい。

停滞については説明するまでもないだろう。消費や投資などの活動が停滞していたので、物価も賃金も低迷を続けた。20年以上も停滞している間、日本の物価や賃金が全くとがらなかつた結果、日本の所得水準は海外の多くの国に比べて見劣りする状況になってしまった。

停滞と安定は裏表の現象である。経済は停滞していたがゆえに、安定もしている。この時期に企業の倒産が多かったわけではない。失業率は10%近いような高い水準になったわけでもない。経済危機が起きたわけでもない。物価も

新陳代謝と日本経済の復活

賃金も変わらない世界で、多くの人は同じような生活をしてきたのだ。安定していたので安心していただけもあるが、気づいてみたら日本は貧しくなっていた。これがデフレの結果である。

デフレの時代は終わろうとしている。物価は確実に上昇を続けている。物価の動きには追い付いてはいないが、賃金も上昇している。こうした物価や賃金の上昇を受けて、日本銀行は脱デフレの金融政策に移行するような動きを見せ始めている。そうした中で、金利がプラスになる世界が見え始めてきたのだ。

デフレからの脱却によって、停滞と安定の時代は、変化の時代が変わろうとしている。変化には二つの意味が込められている。一つは安定が崩れるという意味だ。物価が上がり人々の生活が影響を受けている。金利上昇の影響も大きいだろうし、為替レートも変動する。賃金上がることは勤労者には好ましいが、労働コストが上がる事業者にとっては嬉しいことではない。安定が好ましい意味合いを持つているように、変化にはマイナスのイメージもある。多くの人がインフレに警戒感を持つのは当然だ。変化にはプラスの面も大き

い。そもそも物価や賃金が増え始めるのは、需要が動き始めたからだ。需要の拡大が人手不足の原因となり賃金引き上げの原因となる。需要が低迷していたら、企業も積極的に値上げに踏み切ることはできないだろう。昨年末から年初にかけて日本の株価が好調であるのも、こうした停滞から変化への経済の移行を市場が好感しているからだ。もつとも、株価は常に変動に晒されるものであるのに、高株価がいつまでも続くとは限らないが。

日本経済が停滞と安定の時代から変化の時代に移行する中で、新たなキーワードとして出てきたのが「新陳代謝」である。賃金や金利が上がっていったら、企業の人件費や資金コストが増加する。そうしたコスト増は業績の悪い企業には負担となるだろう。また、多くの企業が値上げを行う中で、競争力のない企業は値上げをすることができない。

新陳代謝とは、競争力の落ちた企業や産業が淘汰され、新たな産業や競争力のある企業に重心が移っていくことである。デフレから脱却しつつある日本経済では、新陳代謝の動きが強まっており、これが日本経済の復活につながることを期待したい。